H30年度　総括コメント（美術学部）　※育児休暇中を除く。

専攻・コース名	職名	氏名	総括コメント
日本画	教授	北田　克己	制作においては第103回院展では内閣総理大臣賞を受賞した。また研究面では膠文化研究会運営委員として東京藝大において膠文化研究会、東京文化財研究所、東京藝術大学保存科学研究室と共催で研究会および展示「膠と修理　―＜序の舞＞を守る」を開催した。 文化財保存修復研究所所長として研究所運営と並び、県内文化財関係のネットワーク構想実現に努めた。社会貢献としては院展の審査員、上野の森美術館大賞展審査員、愛知県文化財保護審議委員ほかを務めた。
日本画	教授	岡田　眞治	センター長業務（五芸祭、研修会の主催）など忙しい一年となった。
日本画	准教授	井手　康人	公募展の審査や発表を通して、自身の研究内容も作品が受賞する等の評価も得ており、充実していると思える。科研の準備も進めており、より深く広い研究内容が求められているので、次年度もさらに推進したいと思う。
日本画	准教授	吉村　佳洋	日本画の制作研究においては個展や公募展への発表を通し、自身の研究内容を客観的に考察する事が出来たと思える。今回の反省点を今後の制作に活かせるよう研究を重ねたいと考える。また一昨年度から科研に採択されたことにより、より深く日本画の画材や技法の研究が深まると考えられる。
日本画	准教授	岩永　てるみ	研究活動、教育活動、大学運営、社会貢献共に当初立てた自己の計画を概ね達成出来たと考える。
日本画	准教授	阪野　智啓	日本画分野では美術館からの依頼などもあって、今後も歴史画や祭礼画の研究を進めたい。また古典絵画技法に関わる各研究では、外部の識者との関わりもいっそう強まったことを実感し、共同研究の素地が固まったように思う。修復研究所の活動も相まって外部機関との連携が多くなったこともあり、それに対応するためにもますます自身の研究の充実を図らなければならないと感じている。
油画	教授	寺内　曜子	英国のグループ展に選ばれて出品のために３週間英国に滞在し、英国の美術館内での作業や美術関係者との再会や新たな出会いがあった。Tate Gallery アーカイブ用のインタヴューを受けるなど、1979-98年の２０年にわたる英国滞在中の作家活動が英国内で認められていることを確認でき、今後の活動にも繋がった。ロンドンでは展覧会を多く見学し展示作品の写真を撮り、帰国後授業などで学生に見せ、英国の美術状況を伝えることができ、好評だった。寺内研究室の大学院生も優秀学生に与えられる「片岡球子基金」を受賞した。
油画	教授	設楽　知昭	研究制作は新しい展開が始まり、充実した。教育活動、大学運営、社会貢献も概ね目標を達成したと思う。美術学部長として努力した。
油画	教授	阿野　義久	今年一年間は研究分野において精力的に動き、発表回数こそ前年度より少ないがその内容は充実していた。 その結果として社会貢献の分野において幅広く社会とのかかわりを持つことが出来たと自覚している。
油画	教授	倉地　久	研究・教育・運営・社会貢献に対して、バランスよく自身が努力し本務を遂行できたと考えている。特に、資料館長・芸術創造副センター長・教研審メンバーとして、大学運営と業務に昨年より一層深くかかわり、助力できたと考えている。また、国際交流に関しても自己の教育・研究をより深める成果があったと考えている。

H30年度　総括コメント（美術学部）　※育児休暇中を除く。

専攻・コース名	職名	氏名	総括コメント
油画	教授	額田　宣彦	・研究活動～目標を達成、研究を深めることができた。学生研究アトリエが狭く拡張の必要性を感じた。・教育活動～ゼミ、作品講評会、討論会、レクチャー等を全学年に渡り実施。学生の自主性、思考力、実践力を育めた。・大学運営～当初計画より業務が増加し研究活動の一部に支障があった。次年度は研究とのバランスに配慮したい。・社会貢献～美術展審査。個展カタログの作成。特に個展は準備に十分な時間を費やし検討を重ねたので非常に充実したものとなった。
油画	准教授	井出　創太郎	11年間継続開催してきた「落石計画」が評価され、網走市立美術館においてユニット単独による展覧会開催に繋がった。研究活動としては、実り多き年度となった。研究室学生の研究発表の場として企画した女木島での展覧会は台風の影響で、開催日が2日間となったことは、非常に残念であった。今後、研究室所属博士前期課程学生の研究成果発表の場を新たに設けるよう努力したい。
油画	准教授	高橋　信行	研究活動においては新たな制作方法を取り入れたことで進展があった。 一方、社会貢献についてはあまり積極的ではなかった。
油画	准教授	白河　宗利	研究活動においては、個展を２回開催、AFAF2018（アートフェアアジア）にも出品し、専門である絵画の技法材料研究の新たな知見や成果が上がった。その一方で、理論研究や外部から依頼された業務、大学運営の比重が大きくなりすぎている感があり、来年度からは創作研究とのバランスを取りながら進めていく必要がある。
油画	准教授	大﨑　宣之	研究発表として、国内外にて個展、グループ展を合わせて7件（国内6/海外1）の展覧会に参加し、教育活動としてのゼミ合宿や展覧会企画運営 (2件)を行い実行した。社会活動として講演会等7件や各種委員の活動など充実した年度となった。
油画	准教授	岩間　賢	本年はこれまでに取り組んできた研究活動に加え、経済産業省産学連携サービス経営人材育成事業という新たな研究活動を開始した。また、科学研究費助成 (課題番号17K18463)では研究最終年として成果をまとめた。教育活動では着任後の2年間に渡る教育内容を検証し、学生に沿った質の高い実技授業カリュキュラムを編成した。大学運営では、芸術資料館運営委員として卒業・修了制作展の展覧会運営や本学が初出展する東京アートフェアーの企画運営に関わった。社会貢献では、文部科学省中国政府奨学金審査委員に加え、岐阜県白川町と千葉県市原市のレジデンス審査員、東京オリンピック・パラリンピックのリーディング芸術文化プログラムに参与した。
油画	准教授	猪狩　雅則	教務委員では大学の運営方針などを踏まえて適宜発言し、運営参加できてきたと感じている。専攻内では、学生や教員の意見を吸い上げながら、カリキュラムの修正を積極的に行い、より充実したカリキュラムの作成を目指した。学生の指導は、相変わらず難しさを感じているが、学生の特性を見極めながら、対応できてきたように思う。
油画	講師	安藤　正子	教員三年目でありますが、研究活動、教育活動、大学運営、社会貢献、それぞれの分野で概ね目標は達成できたと思います。来年以降も引き続き積極的に取り組みたいと思います。
彫刻	教授	大塚　道男	国画会が主催する国展を中心に制作発表する。制作・運営ともに今後の展開について万全をはかりたい。社会貢献において自ら学ぶことが多く、また、各方面の方々との交流など有益にかかわった。特に野外展・ＣＢＣ展・瓦コンクールなどで多くの成果が得られた。学生への指導については課題も多く、個人指導・対話等が結果として少ないように思われ、もう一歩踏み込む姿勢で対応していきたい。

H30年度　総括コメント（美術学部）　※育児休暇中を除く。

専攻・コース名	職名	氏名	総括コメント
彫刻	教授	土屋　公雄	30年度の研究活動においては、新潟市で開催された「水と土の芸術祭2018」に出品参加。またスコットランドで開催されたエジンバラフェスティバル2018「スコティッシュ・カウンシルコレクション」展参加出品。委員会では、学生委員会委員並びに芸術情報センター運営委員会（図書館運営委員会）を務めた。社会貢献としては、「松戸アートピクニック」など継続のプロジェクトにより地域活性化企画を展開しました。以上のことから、自己評価として目標はおおむね達成することが出来た。
彫刻	教授	神田　毎実	年度当初の計画は概ね実施をすることが出来た。特に、種蔵プロジェクトや脈波計の開発等に代表される、早急の成果を求めない研究室の長期的な取り組みが具体的な形で成果を現し始めており、今後は、基本姿勢の維持を前提としてより広い視野のもとでの具体的な計画の推進が、継続性を考慮しながら試みられることが重要になると考えている。
彫刻	准教授	竹内　孝和	研究活動では当初予定していたドイツでの個展・教員展・韓国のグループ展に新作を発表し好評であった。教育活動では3年ゼミで受講生の半数を担当したが概ね良好な成果が得られたと感じている。また大学運営では入試委員会・入試広報委員会・採用人事委員会の3つの重要な委員を務めた。社会貢献では韓国から教職員3名、学生20名を招き、学内でワークショップや講演会を企画し、参加した学生や教員から高い評価を得ることが出来た。
彫刻	准教授	森北　伸	概ね達成出来たと思います。特に水と土の芸術祭に参加したことにより、研究、教育、運営活動の自身への指標になりました。
彫刻	准教授	村尾　里奈	本年度はイギリスのセントラルセントマーチンズ校からの留学生キアラブラウンさんの受け入れ担当となり、授業を英語と日本語の両方で行うなど、学生が意欲的に学ぶことのできる環境づくりに力を入れた。また村尾ゼミ「空間の彫刻」では、森林公園で開催される「植樹祭あいち」のおもてなし花壇のコンペティションに取り組み、参加した学生のうち2名のプロポーザルが最終審査で選ばれ、実制作に進むことができた。
芸術学	教授	中　敬夫	・「研究活動」と「教育活動」に関しては、可もなく不可もなしといったところ。 ・「大学運営」に関しては、例年以上に多忙で、たくさん「働かされた」という印象。 ・「社会貢献」に関しては、特に言うべきことはない。
芸術学	教授	小西　信之	本年度は研究活動としてここ数年やってきた大著の翻訳が、年度末・来年度早々に続けて２冊出版される予定であり、大きな成果物を世に送ることができることになる。長年研究を続けているスミッソンの翻訳も紀要に一本発表することになった。このペースで今後も研究に勤しみたいと思う。 今年度も昨年同様、大きな翻訳を２つかかえ、大部分の時間をそれに割いているが、出版されればともに現代美術界にとって有意義な業績となる（順調にいけば次年度内に両方（ロザリンド・クラウス『視覚的無意識』、『Art Since 1900』）とも出版予定）。現在は最大限にこれに注力している。その他教育活動、大学運営は特に大過なくできたと考えている。
芸術学	准教授	高梨　光正	本年度前期は体調を崩し、当初予定したような研究活動を実施することができなかったが、後期は他大学でのヴァザーリに関する研究をはじめ、レクチャー・コンサートのための準備調査の過程で、大きな研究成果をあげつつある。その成果は来年度以降に論文その他の形で発表されることになろう。
デザイン	教授	中島　聡	研究・教育活動についてはおおむね目標を達成し、特にアイシン・神田教授と連名で申請した国内・米国特許申請が受理されたことは、大学にとっても大きな成果と言える。

H30年度　総括コメント（美術学部）　※育児休暇中を除く。

専攻・コース名	職名	氏名	総括コメント
デザイン	教授	関口　敦仁	平成３０年度は科研の採択や文化庁との共同研究、連携事業など、調査研究のための活動を行なった。また、デザインの新しい授業を始め、新たなメディアを利用したカリキュラムを進めた。また、メディア芸術の分野では文化庁が進める連携事業やデータベース構築などをサッポートし、文化の啓蒙的活動を進めた。以上のように今年度予定していた活動はほぼ達成し、その結果も残すことができたと判断する。
デザイン	教授	柴崎　幸次	日常の教育、研究、運営の業務がかなり多忙になっており、あまり考える時間がないまま進んでいる。
デザイン	准教授	今尾　泰三	視覚伝達デザイン領域の教員が少なくなるなど、いくつかのアクシデントがあったが、教員間で補いあい、結果としては充実した年度になったのではないかとおもっている。
デザイン	准教授	石井　晴雄	本学のホームページに掲載します。 受託研究2件、受託事業1件、国際会議口頭発表１件、国際会議論文１件、紀要投稿１件、その他地域でのワークショップ１０回、その他イベント、講演、デザイン制作、番組制作など充実した研究活動を行うことができた。
デザイン	准教授	森　真弓	今年度は、継続している社会貢献活動をきっかけにした、新たな連携プロジェクトなど、研究の展開につながる活動が増えた。
デザイン	准教授	夏目　知道	研究・教育・大学運営・社会貢献、ともに予定通り推進することができました。
デザイン	准教授	佐藤　直樹	30年度は「研究」「教育」「大学運営」「社会貢献」を積極的かつバランスよく遂行することができた。それぞれに、次年度の活動への布石となる業績を残すことができた。
デザイン	准教授	本田　敬	今年度は日比財団の研究助成を受け、福祉施設との協同が大きな取り組みとなった。成果発表は来年度末を目標にデザイン開発を行って行くが、現時点での外部評価も高く、社会でその研究が実質的な貢献できるよう継続して探求していきたい。また、今年度は取り組みができなかったが「国際交流事業」を来年度以降で強化していきたい。
陶磁	教授	太田　公典	作家としての制作活動、学術研究活動、地域における活動と全て染付というキーワードによってつながるよい循環になっている。今後は各分野において、より質の高い内容を目標としたい。
陶磁	教授	友岡　秀秋	産学連携事業とコンペ(CLDA)開催事業に追われている感がある。しかし私の専門であるプロダクトデザインは、社会との関わりのなかで成り立つものなので、やり甲斐を感じている。また学生達にとっても好影響であると確信している。今後も更にセラミック関連産業の活性化と若手の幅広い人材育成に寄与できる様、努力していきたいと考えています。
陶磁	教授	梅本　孝征	年度を通して研究活動、教育活動、大学運営、社会貢献において、多くの実績と成果を得ることが出来た。主査資格を得た博士後期においては、31年度に向けた良い活動ができた。

H30年度　総括コメント（美術学部）　※育児休暇中を除く。

専攻・コース名	職名	氏名	総括コメント
陶磁	准教授	長井　千春	今年度は、国際展のオープニング、シンポジウムへの参加や、ソウル科学技術大学美術デザイン学部セラミック部門と本学陶磁専攻間の交流協定を締結するなど、特にアジアの国々との国際交流事業に積極的に取り組むことができた。
陶磁	准教授	田上　知之介	研究活動、教育活動、大学運営、社会貢献において、概ね目標は達成できました。課題であった個人研究、博士前期課程の教育方法、国際交流においても、今後の展開が期待できる取り組み方ができたと感じています。
陶磁	准教授	佐藤　文子	平成３０年度の計画に沿って各事項ともに積極的な取り組みを行うことができた。 特に研究活動においては、学長特別研究費（アシスト基金）による障害者福祉支援活動やこどもを対象としたWSを行うことで、陶芸教育の取り組みと素材への可能性を模索することができ、陶磁器における色彩と原料素材についての研究を行うことができた。 次年度においても引き続き、陶磁原料や釉薬分析による多岐にわたる陶芸表現の可能性を探求していきたい。
教養	教授	清道　正嗣	研究面の進捗は予定よりも少なかったが、特別な発見はあった。教育・大学運営についても問題なく通常レベルで実施できた.
教養	教授	石垣　享	研究および学会活動では、例年以上に多くの業績を残すことができた。中学校からの依頼講演等の社会貢献も積極的に行った。自由研究ゼミナールの授業の改革は成功したが基本体育での落第者が増えたので、来期は減少させる試みを行う。人事委員会では最大の懸案事項の解消に積極的に関わった。